＃12「遊休農地を活用した取り組み」（長野県王滝村）

1．概要

運営主体	王滝村社会福祉協議会、地域住民		
所在地	長野県木曽郡王滝村	人口規模*	715 人(R2.10 現在)
活動展開の範囲	王滝村内		
活動拠点の種類	遊休農地		
活動開始年	2018（H30）年		
活動概要	・急激な過疎化が進むなか、ともに支え合う地域づくりのため、高齢者の生きがい・社会参加の場づくり、世代間交流、伝承を目的としている。 ・遊休農地を活用した花畑づくりや伝統野菜栽培の活動を行う。他分野と連携、協働することで地域の元気づくりをすすめ、高齢就労や地場産業の発展を目指している。		
対応する地域課題	地域におけるつながりの希薄化 就労や社会参加の機会がない（乏しい）こと 地域経済活動の縮小（雇用の場不足、空き店舗増加等）		

*人口出典：王滝村 WEB サイト「おうたきデータブック」 http://www.vill.otaki.nagano.jp/aboutus/gaiyou/gaiyou/data004.html

2．活動の展開プロセス

■地域の背景

・人口約 700 人の王滝村では近年人口減少が顕著で、高齢化率は42.3%となっている。独居世帯、高齢者のみの世帯は 6 割ほどで、単身の方がとても多い。2022（R4）年には、村内の中学校が隣の地域に統合され、JA 金融支所も閉所される予定である。村内の機能や人材や資源がここ 5 年みても急速に落ち込んでおり、限られた人材が一緒になって、民間も含めて地域づくりできないか考え、それぞれの主体にとってプラスになることを目指している。

・高齢になっても畑で仕事をする人が多く、介護サービスへの抵抗感が強く認定率が低い状況である。協力を得やすい「ふだんの生活の場」が良いと考えていた。

■協議体での検討

・きっかけは、2016（H28）年に国の新しい総合事業による体制整備事業を「生活支援ネットワーク

事業」として社協で事業受託。協議体として、関係機関や団体の長等による「運営委員」と団体・ボランティア活動者、専門職及び行政等による「推進委員」を設置した。

・その後 3 つの専門委員会が設置され、その中に「高齢者の社会参加と就労活動支援委員会」が置かれた。

・検討を進める中で、2017（H29）年に「話し合いもいいけど、1 つでもやってみよう」という声が上がり、具体的な活動として「遊休農地を活用した取り組み」が提案された。

■場所の確保

・2018（H30）年には、話し合いの場に役場関係の福祉関係以外に農業係の担当者も参加していた。周囲には遊休農地・耕作放棄地が多く、農業係から具体的に使っていない場所の提案があり、試行的に取り組んでみることになった。

POINT

場所探し―ふだんの生活の場に注目

介護サービスへの抵抗感がある地域柄、ふだんの生活の場である農地に注目した。
話し合いの場に農業係がいたことをきっかけに、
遊休農地を借りて試行的に始めることができた。

■花畑づくり・王滝かぶづくり開始

・2018（H30）年の 5 月から景観整備を兼ねた花畑づくり（種まき、草刈り）を開始した。村内から提供してもらったひまわりの苗やコスモスの種を蒔いた。

・同年 8 月からは、様々な住民向けの活動のための資金集めも見据えて地元の伝統野菜である王滝かぶを栽培を開始した。畝立て、種まき、間引き、収穫等を行う。栽培したかぶは地元の農協に受け取ってもらったりして、木曽地方の伝統的な漬け物である「すんき」や赤かぶ漬けの材料にしている。社協で取り組んでいるお弁当作りがあり、その中に漬物を入れている。若いスタッフも高齢者に教えてもらいながら取り組んでいる。

・2018（H30）年 11 月には、地域の交流の場を作りたいと考え、1 年の締めくくりとして収穫祭を兼ねた地域交流会を開催した。

・この頃、豪雨災害に遭って長期避難をしていた方もいたため、収穫したかぶを使った「すんき」を漬け、お楽しみ弁当のおせち料理に入れて届けた。

地域住民の声は次頁へ

■物品の確保

・畑を耕すには機械がないとかなりの重労働であったことから、畑を耕す機械を近隣の人に貸してもらい、また、直接機械を使って耕してもらい農作業を進めた。

■知識・技術習得

・社協としては農業に詳しくなかったが、当初は農協が一緒になって活動協力しようと考えており、役所が企画したかぶづくりの講習会や機械の講習会にも参加した。実際は、高齢者が先生となって教えて下さったので、知恵をもらいながら進めることができた。

活動体制づくり―農業の知識 POINT

主体である社会福祉協議会は農業の専門的な知識を得るため、
役場主催のかぶづくりの講習会や機械の講習会に参加した。
実際の農作業現場では長年農業に携わってきた高齢者自身が先生となって
若い人に教えるなどして、進めることができた。

■活動資金づくり

・遊休農地を活用した取り組みや、それ以外にも地域交流の場や生活支援などの財源に充てることを見据えて、栽培した王滝かぶによる収入を活用している。
・特に別の財源はないが、実際の活動経費（肥料等）は今のところ寄付で賄うことができているため、栽培したかぶの収入は積み立てている状況である。今後、生活支援など自発的な取組に活用したいと考えている。
・収入面について、実際に農業をやってみて改めて生業にすることの難しさがわかった。労力に対して収入があまりに少なく、ピークの 900kg の時で約 13 万円であった。現在は、地域の方の無償のボランティアで運営している状況である。今後は観光等とも連携して、特産品による活性化にもつなげていきたい。

活動資金づくり―栽培した作物による収入 POINT

農作業を通じて交流をするだけではなく、作った作物を JA に提供したり
漬け物にしてお弁当に入れたりなどして活用している。
今のところ活動は寄付で賄っており、
得た収入を今後の活動（交流活動や生活支援等）のために積み立てている。

■場所の確保の継続

・農地は手続きが煩雑で、農業委員会で諮らないと借りられないという話があった。そこで、2019(R1)年からは、住民の方が所有する遊休農地の利用権を設定し、参加者が無償で借りて、使わせてもらっている。

■活動の継続

・2019（R1）年には夏場の花畑づくりで草の手入れ・草取り等の取組を一緒に実施した。この年は、民間事業者に滞在体験で来訪している外国人がいて、環境美化活動に参加したり、屋外で地域交流会を実施した。
・2020（R2）年はさらに活動を広げていければと思っていたが、新型コロナによって交流の場の企画ができなくなってしまった。しかし、花畑づくりと王滝かぶづくりは続けている。
・行政や社協の職員も高齢者も一緒にやっていけたらいいなと考えており、役場の若い職員も駆り出されて収穫し、高齢者の方から色々なことをお聞きしたりしながら活動をしている。年齢層は若い方は社協や行政の職員も含めて 20～90 代の方が参加している。

【参考】これまでの活動実績

2018（H30）年：延 25 日（5～12 月）／延 151 人（31 名）参加 ➡かぶ収穫 326Kg
2019（R1）年　：延 20 日（5～12 月）／延 122 人（32 名）参加 ➡かぶ収穫 907Kg
2020（R2）年　：延 20 日（5～12 月）／延　96 人（26 名）参加 ➡かぶ収穫 808Kg
2021（R3）年　：延 23 日（4～12 月）／延 100 人（26 名）参加 ➡かぶ収穫 569Kg

３．地域住民への影響や効果など―参加者（住民）の視点から―

遊休農地を活用した取り組みによって、幅広い世代の地域住民が交流するきっかけが生まれている。過疎が進み社会資源が限られている状況の中、高齢者が楽しみながら活躍し、社協等とつながる場が作られており、地域における連帯感や安心感の醸成に寄与している。ここでは、活動に参加している住民２名の声を紹介する。

（参加者・推進委員　Ａさん　70 代男性の声）

・ 社協との関わりがあったことやシルバー人材センターに行っていたことをきっかけに、遊休農地を活用した取り組みに初期の頃から活動に参加している。高齢者でも「このようにすれば稼げる！」ということをテーマに参加している。
・ 社協を中心に進めてもらっている中で、草刈りや収穫など参加できないこともあるが、仲間づくりに重きを置いて参加している。
・ かぶ以外にも他の作物に挑戦したいと思っているが、サルによる被害も多く難しさもあり模索している。次に作る作物の話し合いを春に予定している。

（参加者・推進委員　Ｂさん　80 代女性の声）

・ 王滝村のシニアクラブである王寿会で活動しており、推進委員として参画している。周囲に声をかけて、遊休農地を活用した取り組みに色々な人を呼び、知恵をもらっている。
・ 農地の荒廃や過疎化が進む中、社協が一生懸命やってくれていると感じており、協力をしたいと思っている。
・ 社協が色々な面で仲介をしてくれてとても助かっており、村民がもう少し協力できればいいなと思っている。
・ 農作物と一緒に、人と人の心のつながりを広げていけたらと思っている。

４．今後に向けて

（１）今後の展望

・今後は地域の中での連携と協働を進めていきたいと思っている。民間との間では、栽培したものを旅館業している方に扱ってもらったり、観光事業者と一緒になって何かしたりということも考えている。作ったものを加工することで地場産業・特産品になり、それを高齢者が一緒に作って売るということにつながれば、福祉という分野からは離れていってしまうが、そういうこともできたらいいなと願っている。そこまで壮大でなくても、村の中でみんなが協力して一緒にできればと思っている。

・人口減少で担い手が不足する中、活動の継続と自発的な組織とリーダーの育成が課題である。

（２）自治体に期待すること

・これまで、人口の少ない村で福祉に取り組んできて、社協も自治体もお互いがそれぞれの目的に沿って取り組んできたと思っている。現在、村では総合計画を立てており、皆さんが一緒に協働していこうという話をしているが、まだまだ行政と民間の温度差も感じている。行政にとっては、必ずしも協働での取組に前向きでないこともある。現在は、関心を持ってくれている若い職員が協力的に参加しているので、これまでの壁を崩して一緒になって地域の課題に取り組む機運が高まればと期待している。

活動団体の情報	社会福祉法人王滝村社会福祉協議会 長野県　木曽郡王滝村　2830-1　王滝村保健福祉センター Tel　0264-48-2008 Fax　0264-48-3033 WEBサイト　https://www.shakyo.or.jp/hp/about/index.php?s=919 視察の受け入れ：相談可能